

## コーヒーを表す中国語名称の変遷

田野村忠温

**要旨**：現代中国語（普通話）におけるコーヒーの名称である *kafei* は、名称の歴史的な変遷の結果である。ここでは 19 世紀から 20 世紀初期にかけての西洋人による辞書や語学書を中心とする資料の調査に基づいて、地域的な変容を伴うコーヒーの名称の展開を跡付ける。*kafei* は、広東語で作られた *gafi*、*gafei* という名称を起点とする変遷の末に、20 世紀になって一般化した名称であった。

従来の音訳語の研究においては発音に対する考慮が全般に不足していた。コーヒーの名称の歴史を明らかにするには、過去におけるその発音の様相の分析を欠かすことができない。

**キーワード**：coffee kafei 咖啡 外来語 音訳

### 1 はじめに

コーヒーを表す中国語の名称には歴史を通じて大きな変遷があった。しかし、その事実は従来ほとんど気付かれず、また、気付かれても適切に考察されることがなかった。ここでは、過去の中国語におけるコーヒーの名称の多様性と変遷を資料の分析に基づいて明らかにする。

なお、論述に際し、漢字は引用の文脈も含めて原則として現代日本の字体による。

### 2 従来の記述とその問題点

コーヒーの中国語名称の歴史に多少とも関わる記述には、劉・高・麦・史編(1984)、Masini(1993)——そこに付録として収められた *Vocabulary of neologisms in XIXth century texts* (19 世紀文献新語語彙集)——、香港中国語文学会詞庫工作組(1994, 1997)、近現代漢語新詞詞源詞典編集委員会編(2001)、史(2004)、黄編著(2010)、史主編(2019)などがある。<sup>1</sup> しかし、そのいずれにおいても、漢字による音訳表記の多様性には注意が払われているが、言語表現の重要な要素である音形、すなわち、発音の問題が正当に扱われていない。

黄編著(2010)は「咖啡」の項目に、過去の資料に見られるコーヒーの名称の多様な音訳を列挙している。それをそのまま引用すれば次の通りである。

---

<sup>1</sup> ほかにコーヒーの名称の歴史を主題とした最近の論文として祝・趙(2019)があり、多数の先行研究に記述された過去のコーヒーの名称を調べてその変遷の「文化動因」を論じているが、本稿の立場から見るべき要素はない。日本の百科事典に記された、中国に伝わることのなかった日本の音訳まで取り上げており、しかも、百科事典を誤読してその音訳の出典も誤っているなど問題が多い。

哈非、加非、加啡、加菲、茄菲、架菲、架非、架啡、架飛、迦非、噶菲、高啡、茄非、考非、喀啡、珈啡、加非茶、阿非茶

膨大な資料に基づくと見られる調査の報告として興味深いのが、この種の記述にはそれらの音訳によって書き記されたコーヒーの名称がどう発音されていたのか、すなわち、その名称が結局何であったのかという重要な視点が欠落している。

香港中国語文学会詞庫工作組(1994)は一般の辞書から次のような説明を引用している。

“咖”本有三音: jiā, gā, kā。“咖啡”中的“咖”讀 kā 音。(「咖」には本来 jiā, gā, kā という3つの発音がある。「咖啡」の「咖」は kā と読まれる。)

しかし、「咖」の多音性に関するこの説明は現代中国語における事実を述べたものに過ぎない。コーヒーの名称に含まれる「咖」が過去においてどう読まれていたかは別個の問題である。むしろ、「咖」が「咖啡」では ka と読まれ、カレーを表す「咖喱」では ga と読まれるという事実は、いずれか一方もしくは両方の読みが歴史的に変化した可能性を示唆している。以下で述べる通り、少なくともコーヒーの名称における ka の読みは歴史的な変化の結果として生じたものであった。

コーヒーの名称の発音に関係した記述もあるにはある。劉・高・麦・史編(1984)は「咖啡 kāfēi」の項目とは別に「加非 jiāfēi」という項目を設けている。近現代漢語新詞詞源詞典編集委員会編(2001)はコーヒーの名称の用例の漢字表記ごとに独立の見出し語を立て、例えば、「咖啡」と「喀啡」の2項目には kāfēi、「考非」には kǎofēi、「加非」や「加菲」には jiāfēi、「架非」には jiāfēi という発音を記している。史主編(2019)も、「咖啡 kāfēi」のほかに「高啡 kāofēi」と「考非 kǎofēi」の見出し語を立てている。しかし、これらは一見名称の発音を考慮に入れているようで、実のところ妥当な記述になっていない。なぜならば、いずれも種々の漢字表記をその普通話における発音に基づいて分類したものに過ぎないからである。名称の用例の発音は、当該の資料の著者が意図した発音の観点から考えなければならない。近現代漢語新詞詞源詞典編集委員会編(2001)が『海国図志』に現れる「加菲」という音訳の用例を挙げてその発音を jiāfēi と記しているのは、無意味と言うよりも誤りである。また、以下で具体的に見る通り、同一の表記であっても方言や時代によってさまざまに読まれた。したがって、歴史的な観点からすれば、「咖啡」をもっぱら kāfēi という発音の語として示すこともまた誤りである。筆者の見るところでは、これらの辞書においては共時的な観点と通時的な観点が区別されることなく混在している。

史(2004)と史主編(2019)にはコーヒーの名称の来源の問題、すなわち、名称が欧州のどの言語からの借用かということに関する考えが述べられている。私見によればこの問題はもはや解決を望まず、したがって、本稿では考察の主題としないが、名称の変遷の考察を終えたあとで史

の見解を検討する。<sup>2</sup>

### 3 コーヒーの名称の変遷

さてこれより、19世紀から20世紀初頭にかけての、諸方言を含む中国語に関わる文献に現れるコーヒーの名称を推定、復元する。方言をも対象とするのは、コーヒーの名称の変遷には方言間の伝播に起因する発音の変化が関わっており、したがって、単一の方言の観察では名称の変遷に関する理解を得ることができないからである。

推定される名称の発音は、音声記号ではなく、ピンイン（漢語拼音）を用いて近似的に表記する。これは、書きやすさと読みやすさを考慮してのことである。また、推定による発音には下線を付す。下線は、現代の名称に一致する *ka fei* については実線、それ以外の発音については破線とする。発音の復元は分節音に限定し、声調は捨象する。

コーヒーの名称の推定、復元には、差し当たり、それがローマ字で記された辞書や語学書を用いる。漢字で書かれた通常の中国語文献では、名称中の例えば「咖」がどう読まれていたかが分からないからである。また、名称がローマ字で書かれていても、一般書も使うことができない。音韻的な考慮の足りない文献では、*ka* と綴られていてもそれが [*ka*] を表しているのか [*kʰa*] を表しているのかといったことが分からないからである。

以下において、筆者の確かめることのできた30件余りの文献におけるコーヒーの名称の記述を出版年順に逐次検討する。分かりやすさのために、現在使われている *ka fei* という名称の出現時に着目し、その前後の時期に二分して述べる。王(1958)は、中国語の新語には音訳によるものが非常に少ないとし、比較的早くからの例には「打(臣)」(*dozen*)があり、比較的新しい例には「咖啡」(*coffee*)「沙發」(*sofa*)「蘇打」(*soda*)があると述べている。しかし、これは単純な事実誤認で、*coffee* の音訳の歴史は少なくとも19世紀初期にさかのぼる。

---

<sup>2</sup> 本稿はコーヒーの名称の語義の問題には立ち入らないが、ここで私見を一言しておく。黄編著(2010)は「咖啡」に、①コーヒーの樹木、②その種子で作った粉末、③その粉末を使って作った飲料、という3つの語義を認定している。しかし、コーヒーの名称の出現例をその区別に基づいて分類することは一般に困難である。黄編著(2010)は、①の語義のもとに Robert Morrison による華英辞典『五車韻府』(本文後出)に現れる「咖啡」を挙げているが、使用の文脈のない単独の語としての出現では①～③のいずれの語義の例であるとも言えない。強いて言えば、コーヒーを栽培する立場にない限りその樹木を意識することはほとんどないであろうから、『五車韻府』の「咖啡」はむしろ③ないし②のつもりで書かれたと考えるのが自然である。また、例えば「コーヒーの香り」「コーヒー味」「コーヒー色」「コーヒーケーキ」のような言い回しにおける「コーヒー」が②と③の語義のどちらに該当するのかわかることも決めがたい。②と③をほぼ確実に区別できるのは、「コーヒーを袋に詰める」「コーヒーを飲む」などと言うときのように粉末か液体かが文脈上分かる場合に限られる。さらに言えば、「烘焙咖啡(コーヒーを煎る)」と言うときの「咖啡」は①～③のいずれでもなくコーヒーの種子を表しており、そのことは語義の3分類自体が不十分であることを意味している。

### 3.1 ka fei 出現前——19 世紀末まで

ローマ字で書かれたコーヒーの名称が出現する早期の文献は、黄編著(2010)にも引用されている華英辞典 Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language, Part II* 『五車韻府』, Vol. I (1819 年) である。「咖」の項目に次のように書かれている。

咖 This character is in vulgar use. Kea fei 咖啡 coffee. Kea-la-pa 咖喇吧 vulgar name given to Java. (この漢字は通俗的に使われるだけである。「咖啡」、コーヒー。「咖喇吧」、ジャワの俗称。)

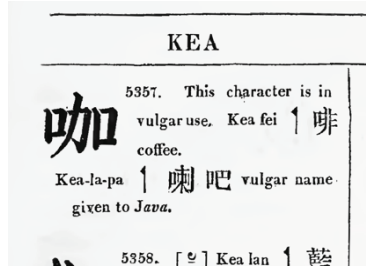


図 1 「咖啡」初出——Morrison『五車韻府』Vol. I (1819 年)

ここでは「咖啡」の発音は *kea fei* と表記されている。同書の発音表記は南京官話に基づいており——Morrison の辞書のうちで最初に出版された *A Dictionary of the Chinese Language, Part I* 『字典』, Vol. I (1815 年) の Introduction でそう説明されている——、巻頭の凡例における *Anomalies in the orthography* (綴り字における変則的要素) の項目では、北京方言における *k* の口蓋音が次のように説明されている。文中の *ching* と *tsëang* はピンインの *jing*、*jiang* に相当する。

*K*, in the Peking Dialect, before *e* and *i*, is pronounced as *Ch* and *Ts*; thus *King*, is turned into *Ching*; and *Keang*, becomes *Tsëang*. (*k* は北京方言においては *e* と *i* の前では *ch*、*ts* のように発音される。)

また、辞書本文において、*kea* の音節は北京方言では *chea*、広東語では *ka* になり、*fe*、*fei* の音節は広東語でも *fe*、*fei* であると説明されている。こうしたことから、*kea fei* という表記はどのように書かれる南京官話での発音に加え、北京方言での *jia fei* という発音と、広東語での *ga fei* ないしそれに近い発音を表しているものと考えられることができる。<sup>3</sup> 南京官話での発音は *[kea fei]* ないし *[kia fei]* のような発音かと想像されるが、ここでは *jia fei* に合わせて *gia fei* と書く——ピンインに *gia* の表記はないが、*[kea]* ないし *[kia]* という発音を便宜上そのように表す——。同書では子音の気音の有無による対立が適切に示されていないが、ここでの *k* は無気音と受け止めるべきであろう。

<sup>3</sup> もっとも、おそらく方言間の音韻対応上そのように言えるということに過ぎず、Morrison が必ずしも 3 つの方言におけるコーヒーの名称を実際に把握していたということではないであろう。

「咖啡」あるいはその各字に口偏を加えない「加非」は以下で確かめるように当初広東語の発音で *ga fi*——[fi:] という発音を便宜上 *fi* と書く——ないし *ga fei* のように読まれていたはずであるが、それが南京では *gia fei* と読まれ、北京では *jia fei* と読まれていた——正確に言えば、そのようにも読まれていた——ということである。今ではコーヒーは *ka fei* と呼ばれるので、そのような発音があったことは中国語の母語話者にも想像しにくいであろうが、過去の言語に関する事実は現代語の知識では分からない。*jia fei* などの名称は単に推定されるだけのものではなく、それが現実のものであったことが後に見る複数の資料の記述によって裏付けられる。

広東語・英語辞典である Robert Morrison *Vocabulary of the Canton Dialect* 『広東省土話字彙』, *Part I, English and Chinese* (1828 年) には次のように書かれている。これ以後においては、資料からの引用は、見やすさのために、原則として「原語 中国語名称の漢字表記 中国語名称のローマ字表記」という形に統一し、ローマ字の大文字は小文字に変えて示す。辞書の項目としてほぼその形で書かれているものも多いが、項目の順序を入れ替えて引用するものや、句や文からコーヒーの名称だけを抽出して引用するものもある。

coffee 架啡 *ka fe*

この *ka fe* は、上で触れた広東語での *ga.fi* という発音を示すと考えられる。同書巻頭の Powers of the letters (文字の表す音) で、音節末の *e* は英語の *me* の *e* のように読むと説明されている。

広東語の学習書 Elijah Coleman Bridgman *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect* (1841 年) には次のように書かれている。以後、ローマ字表記の名称に付された入力のむずかしい声調記号は省いて引用する。

coffee 嗶啡 *ká fi*

この *ká fi* の発音は *ga.fi* もしくは *ga.fei* であろう。巻頭の Introduction における Explanation of the tones の節で、*i* の発音は *meet* や *feet* の *ee* と同じだが、語によっては *may* や *pay* の *ay* のように発音されると説明されている。

英語・マレー語・中国語(官話)・閩南語・広東語の対訳文例集である James Legge *A Lexilogus of the English, Malay, and Chinese Languages; Comprehending the Vernacular Idioms of the Last in the Hok-keen and Canton Dialect* (1841 年) に書かれたコーヒーの名称は次の通りである。

coffee 架啡 *ká fi, ko-fe*

2つのローマ字表記のうち、広東語の発音として示された最初の *ká fi* は *ga.fi* であろう。巻頭の Table of orthography employed in the Canton dialect に、*i* は *machine*, *marine*, *police* の *i* のように長く発音するとの説明がある。閩南語の発音として示された2番目の *ko-fe* は *gou.fi* ないし *gou*

feiのような名称かとも想像されるが、以下で見る閩南語の名称と異なる点があり、真正性に疑問が残る。巻頭の Preface によれば、閩南語の部分は Legge 自身の執筆によるものではない。

広東語学習書 Samuel Wells Williams *Easy Lessons in Chinese: Or Progressive Exercises to Facilitate the Study of That Language, Especially Adapted to the Canton Dialect* 『拾級大成』(1842 年) および英語・中国語(官話)辞典 Samuel Wells Williams *An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect* 『英華韻府歷階』(1844 年)における記述は次の通りである。

coffee 咖啡 ká-fi (Williams(1842))

coffee 咖啡 kiá fi (Williams(1844))

前者の ká-fi——これは ká fi の誤記であろう——は広東語の *ga. fí*、後者の kiá fi は南京官話の *gia. fi* を表すと考えられる。『拾級大成』の第 3 章における綴りと発音の解説でも、『英華韻府歷階』巻頭の Introduction における綴りと発音の表でも、i は *police* の i などのように長く発音すると説明されている。

英華辞典 Walter Henry Medhurst *English and Chinese Dictionary, Vol. I* (1847 年)には次のように書かれている。

coffee 咖啡 kēa fei、嗜呷 kaou p'he

ここにある 2 つのローマ字表記のうち、第 1 の kēa fei はおそらく南京官話の *gia. fei* であろう。巻頭の Orthography で、ēa は e-a のように 2 母音の連続として発音し、e は *me* の e のように発音すると説明されている。しかし、発音の説明が網羅的ではなく、k や ei については正確なところが分からない。

第 2 の kaou p'he の発音は *gao. pi* であろう。[f]の子音を[p<sup>h</sup>]に変えて *gao pi* とするのは多くの中国人や日本人の素朴な感覚としては奇異に感じられるであろうが、音声学的にはありふれた調音方法の変更に過ぎない。オーストロネシア語族に属するハワイ語では *coffee* は *kope* ([kope]) と呼ばれる。February はハワイ語で *Pepeluali* になる。

ただし、母語に f の子音があれば *coffee* の f もそのまま受け止められるであろうから、それを p に置き換えた *gao pi* という名称は f を持たない方言におけるものであったと考えられる。曹主編(2008)の音声言語地図によれば、f の子音を欠く方言が福建省から広東省東部にかけて分布している。Medhurst は上記の辞書に先立って閩南語の辞書 *A Dictionary of the Hok-k'ènn Dialect of the Chinese Language* (1832 年)——巻頭の Preface によれば漳州方言に基づく——を出版している。同じく巻頭の *On the orthography of the Hok-k'ènn dialect* では閩南語に f の子音がないことが説明されており、実際本文を見ると p'he という綴りは次のようにピンインの p とは異なる範囲の漢字の発音を示すのに使われている。



皮 p'hê、被 p'hē、否 p'hé

とすれば、Medhurst は官話の辞書に方言におけるコーヒーの名称を混入させていることになる。Medhurst は同辞書で方言の問題については語っていないが、巻頭の Preface で、“中国人の言う訳語は特殊なものも含めてできるだけ多く採用した、ただし、それではどの訳語を選べばよいか分からないという苦情も出るだろうから、一般的な訳語を最初に示し、特殊な訳語はその後に置くようにした”と述べている。kaou p'he もそうした編集方針に基づいて付け加えられた特殊な訳語だったと理解すれば方言の混入も納得が行く。

広東語の学習書 Thomas T. Devan *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular), Prepared for the Use of the House-Keeper, Merchant, Physician, and Missionary* (1847 年) は次のように書いている。

coffee 啖啡 ká fa

この ká fa の第 2 音節は例外的で解釈しにくい。同書では「啡」が実際には正常でない字形で書かれている——旁が「井」の横の画を 1 本増やした形、すなわち、「三」と 2 本の縦の画を組み合わせた形になっている——ということもあり、何らかの錯誤が含まれているものと解釈し、無効の情報とする。ká fa はおそらく ká fi などの誤植であろう。

広東語の語彙文例集である Samuel William Bonney *A Vocabulary with Colloquial Phrases of the Canton Dialect* (1854 年) にある次の名称も ga fi であろう。

coffee 啖啡 ká fee

語釈中の中国語の語句に関してその広東語と官話両様の発音を示している英華辞典 Wilhelm Lobscheid *English and Chinese Dictionary with the Punti and Mandarin Pronunciation* 『英華字典』, Part I (1866 年) の記述は次の通りである。

coffee 咖啡 ká fi, kiá fi

第 1 の ká fi は広東語の発音を示しており、これは ga fi という発音であろう。巻頭の Introduction にある官話の発音と綴りに関する解説から、有気音は子音字の後ろに「'」を加えて k' のように示していることが分かる。第 2 の kiá fi は官話の発音を示しており、Morrison の『五車韻府』における南京官話の kea fei と同等である——すなわち、gia..fei.. という発音を表す——ことが、Introduction に掲げられた綴りの方式の対照表から分かる。

広東語学習書 Benoni Lanctot *Chinese and English Phrase Book, With the Chinese Pronunciation*

*Indicated in English, Specially Adapted for the Use of Merchants, Travelers and Families* 『華英通語』<sup>4</sup>, Second Edition (1867年)にある、次の名称は *ga.fe'i* であろう。

coffee 喫啡 ka' fe'

巻頭の Rules for pronunciation は、e は they の ey のように発音すると説明している。「'」は声調の表示である。

閩南語アモイ方言の学習書 John D. MacGowan *A Manual of the Amoy Colloquial* 『英華口才集』(1869年)には次のように書かれている。

coffee 糕丕 ko-phi

ko-phi の発音は *gou.pi* であろう。巻頭の Preface で、o は no の o、i は fatigue や marine の i のように発音すること、そして、有気音は子音字に h を添えて示すことが説明されている。

閩東語福州方言の辞書である Robert Samuel Maclay and Caleb C. Baldwin *An Alphabetic Dictionary of the Chinese Language in the Foochow Dialect* (1870年)には次のような名称が書かれている。「炒」の項目における“コーヒー豆を煎る”を表す例句中に現れるもので、コーヒーの名称の漢字表記はない。

coffee kó pi

この kó pi の発音は *gou.bi* であると考えられる。巻頭の Introduction で、有気音は p', t', k' などのように表すことが説明されている。

英華辞典 Justus Doolittle *Vocabulary and Hand-Book of the Chinese Language, Romanized in the Mandarin Dialect* 『英華萃林韻府』, Vol. I (1872年)の記述は次の通りである。

coffee 喫啡 chia-fei

この chia-fei の発音も *jia.fe'i* であろう。同辞典は有気音は子音字の前に「'」を添えて表記している——「加」は chia、「洽」は'chia と書かれている——。

アモイ方言の辞書である Carstairs Douglas *Chinese-English Dictionary of the Vernacular or Spoken Language of Amoy, With the Principal Variations of the Chang-Chew and Chin-Chew Dialects*<sup>5</sup> (1873年)におけるコーヒーの名称の記述は次の通りである。同辞書は漢字を使っていない。

coffee ko-phi

<sup>4</sup> 同書は米国で出版されたものである。表紙と扉に『華英通語』という中国語の書名が記されているが、中国で出版された『華英通語』の諸版と内容上の関係はない。

<sup>5</sup> 書名中の Chang-Chew and Chin-Chew Dialects は漳州、泉州の方言を指す。



MacGowan のアモイ方言辞典と同じく、この ko-phi は gou pi という発音を表すと見られる。巻頭の Introduction; With remarks on pronunciation and instructions for use では、文字と発音に関して MacGowan に近い説明が述べられている。

広東語学習書 Nicholas Belfield Dennys *A Handbook of the Canton Vernacular of the Chinese Language, Being a Series of Introductory Lessons, For Domestic and Business Purposes* 『初学階』(1874年) の記述は次の通りである。

coffee 咖啡 ka fei

この ka fei の発音は ga fei であろう。巻頭の Pronunciation で、e は they の ey のように発音すると説明されている (ei の説明はない)。有気音は t'ung (「同」) のように表記されている。

英語・呉語寧波方言辞典 William T. Morrison *An Anglo-Chinese Vocabulary of the Ningpo Dialect* 『字語彙解』(1876年) に書かれたコーヒーの名称は次の通りである。

coffee 咖啡 kô'-fi

この kô'-fi はおそらく gou fi ないしそれに類する発音であろう。この辞書でも有気音は k'ong (「空」) のように書かれている。<sup>6</sup>

広東語辞典 Ernest John Eitel *A Chinese-English Dictionary in the Cantonese Dialect, Revised and Enlarged* (1877年) には次のように書かれている。

coffee 咖啡 ká fi

この ká fi の発音は ga fei であろう。巻頭の Introduction における発音の解説で、a は father の a、i は pay の ay を表すと説明されている。

英語・アモイ方言辞典 John D. MacGowan *English and Chinese Dictionary of the Amoy Dialect* (1883年) は次のように記述している。

coffee 高鼻 ko-pi、高披 ko-phi

ko-pi は gao bi、ko-phi は gao pi のような発音であろう。巻頭の Introduction で、有気音は子音字に h を添えて表記し、o は saw の aw、i は pique ([pi:k]) の i のように発音すると説明されている。

フランス語・中国語(官話)辞典 Séraphin Couvreur *Dictionnaire français-chinois, contenant les expressions les plus usitées de la langue mandarine* 『法漢常談』(1884年) とフランス語・呉語上海方言辞典 Corentin Pétilion *Petit dictionnaire français-chinois (dealecte de Chang-hai)* 『法華字彙』(上

<sup>6</sup> 実際には有気音を示す補助記号の形は「'」とは多少異なる。

海土話) (1905年) の記述を合わせて示せば次の通りである。

café 加非 kiā fēi (Couvreur (1884))

café 咖啡 ka-fei (Pétillon (1905))

前者の kiā fēi は、巻頭の Introduction の発音の解説から判断するに、南京官話の gia fei のような発音を表しているものと思われる。後者の ka-fei の発音は ga fei であろう。

中国語に関する各種の話題について述べた Thomas Watters *Essays on the Chinese Language* (1889年) は、外来語を論じた第7章において、南方での ga fei が北京では jia fei と呼ばれることを次のように説明している。

In modern times the word Coffee, the Arabic qahwah, has become well known to many Chinese through intercourse with Europeans. It is generally pronounced *ka-fei*, but it is written in many ways slightly different as 加非, 架非, 珈琲. The Pekingese pronounce these characters *chia-fei*, and they speak of a cup of *chia-fei-ch'a*, that is, Coffee tea, which the Southern people call *ka-fei-ch'a*.

(現代において coffee の語は多くの中国人が西洋人との交際を通じて知るところとなった。一般に ga fei と発音されるが、「加非」「架非」「珈琲」などの少しずつ異なる多くの書き方がある。北京の人はこれらの表記を jia fei と読み、飲料の状態になったコーヒーを jia fei cha、すなわち、コーヒー茶と呼ぶ。南方ではコーヒー茶は ga fei cha と呼ばれる。)

### 3.2 ka fei 出現後——19世紀末以後

官話の学習書である Calvin Wilson Mateer *A Course of Mandarin Lessons, Based on Idiom* 『官話類編』(1892年) には次のような記述が現れる。

coffee 哈啡 k'a<sup>1</sup> fei<sup>1</sup>

この k'a<sup>1</sup> fei<sup>1</sup> は ka fei の発音を表す。同書は巻頭の Introduction において、有気音は子音字に転倒したコンマを添えて示すと説明している。現代の一般的な名称である ka fei のローマ字による表記は筆者の確認の限りにおいてこれが最初の出現である。

啡 Fei<sup>1</sup>.....A phonetic character.  
哈 啡 K'a<sup>1</sup> fei<sup>1</sup>.....Coffee.

図2 ka fei 初出——Mateer 『官話類編』(1892年)

「哈」の字を使った ka の発音の表示は例外的であるが、過去には“ロシア産の上等な毛織物”を表す「哈喇呢」という語があり——「哈喇」はロシア語 халат の音訳——、その「哈」は ka

と読まれた。<sup>7</sup>「哈啡」の表記は同書の1900年と1906年の2度にわたる改訂に際して変更されておらず、以下で見るほかの少数の文献にも現れる。

同じく官話の学習書である A. Théophile Piry *Manuel de la langue mandarine ou recueil idéologique en chinois, français et anglais, des termes, locutions et idiotismes* 『鉛槧彙存』(1895年)には次のように書かれている。同書が北京官話の学習書であることは巻頭の Introduction で説明されている。

café 嘎啡 ka<sup>4</sup> [fɛi<sup>1</sup>]<sup>8</sup>

この名称は ga.fɛi であろう。同書で有気音は k' のようにして示されている。これにより、北方においては gia fei と並んで ga fei という名称も使われていたことが知られる。このことは後に見る複数の文献の記述からも確かめられる。

広東語会話文例集 James Dyer Ball *How to Speak Cantonese: Fifty Conversations in Cantonese Colloquial*, Second Edition (1902年) と英語・広東語辞典 *The Cantonese Made Easy Vocabulary; A Small Dictionary in English and Cantonese*, Third Edition (1908年) は次のように書いている。

coffee 架啡 ká-féi (Ball(1902))

coffee 嗶啡 ká-féi (Ball(1908))

補助記号にわずかな不一致があるが、この ká-féi、ká-féi の発音はおそらく ga.fɛi であろう。同じ著者による *Cantonese Made Easy*, Third Edition (1907年) の前書きにおける Orthography の説明において、éi は Samuel Wells Williams *A Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect* 『英華分韻撮要』(1856年) の í——すなわち、[i:]——に相当すると説明されている。

華英辞典 George Carter Stent *A Dictionary from English to Colloquial Mandarin Chinese, Partly Revised and Supplement Compiled by K. E. G. Hemeling* (1905年) の記述は次の通りである。

coffee 哈非 k'ou<sup>4</sup>-fɛi<sup>1</sup>、加非 ka<sup>1</sup>-fɛi<sup>1</sup>

k'ou<sup>4</sup>-fɛi<sup>1</sup> と ka<sup>1</sup>-fɛi<sup>1</sup> の発音はそれぞれ kou.fɛi、ga.fɛi であろう。同辞書では「扣」の発音も k'ou<sup>4</sup> と書かれている。「哈」の字は『官話類編』では ka という発音を表していたが、ここではそれが kou を示すのに使われている。同書では例えば「加」の発音は chia<sup>1</sup> と書かれていることから、

<sup>7</sup> 「哈喇呢」は最近の中国語辞典には載っていないが、『辞源』(商務印書館、1915年)は「毛織物。為呢中最佳之品。出於俄国。」(毛織物。最高級のラシヤ。ロシア産。)と説明している。井上翠編著『井上支那語辞典』(文求堂書店、1928年)は、「哈」を ka と読む語として「哈喇呢」(ka<sup>1</sup>)のほか「哈利發」(ka<sup>4</sup>)——イスラム国家の指導者の称号カリフ——を挙げている。

<sup>8</sup> 「啡」の発音のローマ字表記は筆者が補った。ここでの [ ] はそのことを示す。当該書はしばしば語句の一部の漢字についてのみ読みを示している。

書名に言う Mandarin Chinese は北京官話を指すことが分かる。北京では古くからの *ga fei* に加え、*kou fei* という名称も使われるようになっていたということであろう。

Ada Haven Mateer *New Terms for New Ideas, A Study of the Chinese Newspaper* (1913 年) には次のような記述がある。

coffee 咖啡 k'a-fei

Note. Probably there is a place in China where these characters are pronounced thus. (注: おそらく「咖啡」と書いて *ka fei* と読む地方があるのだろう。)

著者の夫の著した『官話類編』におけるコーヒーの名称と同じく、k'a-fei の発音は ka fei であろう。著者は『官話類編』と同じく「哈」の字を用いているが、その適切性に確信を持てなかったことが、上に引用した注記から分かる。実際、1917 年に出版された第 2 版では「哈」は「咖」に書き換えられている。<sup>9</sup> 調査の限りでは Mateer 夫妻と Stent の著作以外には「哈」を用いた文献がない。

日本の鉄道院——運輸省、国土交通省、日本国有鉄道、JR グループの前身——によって出版された東アジア各国事情の概説書 *The Imperial Japanese Government Railways An Official Guide to Eastern Asia, Trans-Continental Connections Between Europe and Asia, Vol. IV, China* (1915 年) の巻末に掲載された英露中日 4 言語の対訳語彙文例集にもコーヒーの中国語の名称が現れる。中国語と日本語の文だけを引用すれば次の通りである。中国語文に付した漢字と下線は引用者による。

(這 太 醜 我 要 談 点 兒 的) (ママ)  
Chê ka-fei t'ai-yen, wo yao tan tien-êrh-ti. / Kono kōhii wa amari koi, watakushi wa usuino  
ga suki-desu.  
(再 給 我 倒 碗)  
Tsai kei-wo tao-wan ka-fei. / Mō ippai (kōhii wo) kudasai.

ここでの *ka-fei* も ga fei という発音を表す。この事例も *ga fei* が北方でも使われていたことを示している。

英華辞典 Karl Hemeling *English-Chinese Dictionary of the Standard Chinese Spoken Language* (官話) and *Handbook for Translators, Including Scientific, Technical, Modern, and Documentary Terms* (1916 年) における次の記述は、筆者の解釈によれば、コーヒーの名称の変化の記録となっている。

coffee 加非 k'a (chia) fei

この複合的な表記はおそらく、以前はコーヒーは *chia fei*、すなわち、jiā fei と呼ばれていたが、

<sup>9</sup> それによって注記は不要になったが、第 2 版以後においてもそのまま残されている。

今では k'a fei、すなわち、ka fei と呼ばれることが増えてきたということを説明しているものであろう。

ただし、コーヒーの名称の ga fei, jia fei から ka fei への移行には相当の時間を要したと見られる。華英辞典 Donald MacGillivray *A Mandarin-Romanized Dictionary of Chinese, Including New Terms and Phrases, Now Current* 『英華成語合璧字集』, Fourth Edition (1918 年) に見る、

coffee 咖啡 ka<sup>1</sup>-fei<sup>1</sup>

の ka<sup>1</sup>-fei<sup>1</sup> の発音は ga.feɪ である。同辞書は無気音と有気音を ka と k'a のように書き分けている。同辞書の第 3 版 (1911 年) までの版には coffee は出て来ないので、この ka<sup>1</sup>-fei<sup>1</sup> は 1910 年代に書かれたものであることが分かる。

また、英華辞典 Walter Hillier *An English-Chinese Dictionary of Peking Colloquial, New Edition* (1920 年) にも、

coffee 咖啡 ka<sup>1</sup>-fei

のように書かれており、この ka<sup>1</sup>-fei も ga.feɪ の発音を表す。

英語・漢口方言辞典 Mary Donald Grosvenor *A Colloquial English-Chinese Pocket Dictionary in the Hankow Dialect* (1925 年) には次のように ka fei の名称が記されている。

coffee 咖啡 k'a<sup>1</sup> fei<sup>1</sup>

ga fei, jia fei から ka fei への変化がいつ完了したかを確かめるには、20 世紀中葉以後の資料を調査する必要があるが、少なくとも 20 世紀中葉にはまだ旧名称も使われていたと見られる。華英辞典 Mathews' *Chinese-English Dictionary, Revised American Edition* (1943 年) は、「咖」を chia (=jia) の読みを持つ音訳用の漢字として掲げ、「Also read k'a<sup>1</sup>。」(k'a<sup>1</sup> (=ka) とも読まれる。) という注釈を加えている。同辞典の原本である Robert Henry Mathews *A Chinese-English Dictionary, Compiled for the China Inland Mission* (1931 年) にはその注釈がないことを考え合わせれば、「咖啡」の「咖」の読みの ga, jia から ka への移行は時間をかけて緩慢に進んだものと推定される。

### 3.3 漢字表記文献における用例

以上においては、もっぱらコーヒーの名称がローマ字で記された文献を用いて考察を進めてきた。その限りにおいては、ka fei という名称の使用を確認できる最も古い資料は Calvin Wilson Mateer *A Course of Mandarin Lessons, Based on Idiom* 『官話類編』 (1892 年) であった。

しかし、近現代漢語新詞詞源詞典編集委員会編(2001)に記述された漢字表記の文献における用例の中に、それよりも早い時期の注目すべきものが 2 件ある。

其於日用之物，所最欠者，棉、糸、茶、糖、喀啡、煙、米、香料、裘衣、顔料、金、銀、等物是也。 (林樂知 (Young John Allen) 『中西關係略論』 卷一、1876 (光緒 2) 年)  
 非利比恒 <sup>(フリビン)</sup> 省会曰媽你耳，在呂宋部内，<sup>(ルソン)</sup> 土産頗多，以淡巴菰、考非、麻、糖為大宗。

(洪勳『遊歴聞見録』 卷九 西班牙内編、1887~1889 (光緒 13~15) 年) <sup>10</sup>

最初の例における「喀啡」の読みは ka fei であろうから——その第 1 音節は米国出身の著者による [kʰa] という発音を写したものかも知れない——、ka fei の名称の初出は 1892 年の『官話類編』より 16 年さかのぼることになる。

第 2 の例の「考非」は kao fei で、その第 1 音節が英語の [kʰɔ] を表すと考えれば自然な音訳である。ただし、これはスペインの視察に関わる報告の一部であるので、「考非」を英語の発音の音訳と見てよいかどうかは不明である。いずれにせよ、この kao fei や kou fei (Stent(1905)) の名称は普及せず、最終的に ka fei の名称が定着した。

### 3.4 総括

西洋人のもたらした 2 音節のコーヒーの名称が中国語にも同じく 2 音節語として借用された。そして、それを書き記した漢字表記が各地に伝播し、方言の差を反映してさまざまに読まれた。そのようにして形成された ga fi、ga fei、gia fei、jia fei、ka fei などをはじめとする多様なコーヒーの名称は次に示す一般的な形式にまとめることができる。

$$\left. \begin{array}{l} \text{ga} \\ \text{gao} \\ \text{gou} \\ \text{gia} \\ \text{jia} \\ \text{ka} \\ \text{kao} \\ \text{kou} \end{array} \right\} \left\{ \begin{array}{l} \text{fi} \\ \text{fei} \\ \text{pi} \\ \text{bi} \end{array} \right.$$

図 3 コーヒーの名称の一般形

名称の第 1 音節は 19 世紀初期——あるいは、おそらくそれに先立つ時期——に広東語で「加」や「咖」の字で書かれるようになったときには ga と発音されていたが、音訳が広東以北に伝播すると gia や jia とも読まれるようになった。また、ほかに gao、gou などの発音もあった。

第 2 音節は fi または fei と発音されることが多かったが——この i と ei の二重性が、原語の発音の二重性を反映するものなのか、中国語内部の音韻的な事情によるものなのかは詳らかではない——、方言によっては pi や bi と発音された。

現代中国語で一般的な ka fei という名称の普及は ga fei や jia fei のそれに比べてかなり遅かったと見られる。現在知られている限りにおいて、その使用を確かめ得る最初の資料は 1876 年の

<sup>10</sup> 引用は洪勳著、劉柯校点『遊歴聞見録』(岳麓書社、2016 年)の翻字による。



林楽知『中西関係略論』である（3.3）。

jia fei から ka fei への転換は、おそらく原語の発音からかけ離れた jia の発音を避けようとしたものであろう。すなわち、広東語で原語の発音を模して作られた ga fi、ga fei の名称を表す漢字表記が北方で jia fei と読まれたことによって生じた原語の発音からの乖離を解消するために ka fei という名称が使われるようになったものと推定される。jia fei の名称に抵抗を感じる西洋人もあっただろうし、アヘン戦争後西洋人や外国語との接触の増加とともに jia fei の名称がふさわしくないという認識が中国人のあいだにも生じたと考えることに無理はない。そうした推定を資料的に証拠立てるすべはないが、ほかに考え得る解釈が存在しない。

jia の発音が ka に改められた際、それに合わせて音訳の漢字を「咖」から「喀」（『中西関係略論』）や「哈」（『官話類編』）に改めるということも行われた。しかし、最終的には古くからの「咖啡」の表記はそのままに発音だけを ka fei に改めるという形でコーヒーの名称の変遷は決着を見た。<sup>11</sup>

#### 4 コーヒーの名称の来源の問題

中国語におけるコーヒーの名称が英語に由来する（近現代漢語新詞詞源詞典編集委員会編（2001）、史主編（2019）の「考非」の項目）のか、それとも、ポルトガル語に由来する（国語日報出版部編訳組主編（1981））のか、イタリア語やポルトガル語やフランス語に由来する（史（2004）、史主編（2019）の「咖啡」の項目）のか、オランダ語に由来する（史主編（2019）の「高斟」の項目）のかといった問題はおそらく今となっては解明を望めない。しかし、前節で見た通り、コーヒーの名称の出現する 19 世紀以後の文献の量は英語が圧倒的に多いので、たとえ最初の借用が英語以外の言語からであったとしても、以後のコーヒーの名称の展開に大きな影響を及ぼしたのは英語での発音であったと考えられる。

史（2004）の第 5 章の「附：咖啡的成長」と題された付節と、史主編（2019）における「咖啡」「高斟」「考非」の 3 項目とに、コーヒーの名称の発音と歴史に関する意見が分散して書かれている。史は、名称の第 1 音節について、“当初南方で ga という発音だったのが北方で jia になり、それが英語の影響で ka に改められた”と述べている（「考非」の項目<sup>12</sup>）。これは、本稿で確かめたコーヒーの中国語名称の歴史の中心的な部分に一致し、その限りにおいておおむね正確な推定

<sup>11</sup> 荒川清秀氏のご指摘によれば、英語の発音に近付けるために jia fei を ka fei に変えたと言うのであれば、カナダの国名はなぜ Jia na da から Ka na da に変わらなかったのかといった疑問が生じる。真相は不明であるが、西洋人がコーヒーに言及するのを中国人が聞く機会は多くても、カナダが言及されるのは特定の話題の文脈に限られるという違い、すなわち、使用頻度の大きな差が原因となっていることが可能性として考えられる。

<sup>12</sup> 史主編（2019）に項目執筆者の名は記されていないが、コーヒーの名称の各項目はその内容から史自身による執筆であると推定される

である。<sup>13</sup>

しかし、名称の来源に関する史の記述には議論の余地が多い。まず、史主編(2019)は、「咖啡」の項目ではイタリア語の *caffè* かフランス語の *café*、「高叢」の項目ではオランダ語の *koffie*、「考非」の項目では英語の *coffee* が各名称の起源であると述べている。しかし、普通話での発音ごとに来源が異なるというのは奇妙であるし——同様の問題は劉・高・麦・史編(1984)から見られ、そこでは「咖啡」は英語の *coffee*、「加非」は日本語の「コーヒー」が起源であるとされている——、イタリア語やフランス語からの借用語の発音が後に英語風に改められたとしても、それによって起源が英語に変わるわけではない。「考非」の項目で、それが英語を来源とするとしつつ、*ga* が *jia* になり英語の影響で *ka* に改められたとしている記述も首尾一貫しない。<sup>14</sup> 史の言う名称の起源は、それがどの言語の名称の発音に近いかということに過ぎないように思われる。ともあれ、そもそもコーヒーの音訳を普通話での発音に基づいて分類するという考えに問題があるので(2節)、起源の記述の多重性についてはこれ以上の議論を省く。

コーヒーの中国語名称がオランダ語や日本語からの借用である可能性はまずないであろう。とすれば、名称の来源は英語、ポルトガル語、イタリア語、フランス語のいずれか1つないし複数であることになる。私見によれば、来源をそれ以上限定することは困難であるが、史は先の“英語の影響で *ka* に改められた”という話に続けて、“ただし、コーヒーの名称は最初英語から借用したものではない”と述べている。しかし、コーヒーの名称が英語からの借用であった可能性を否定できる証拠は筆者の把握の限りにおいて存在しない

コーヒーの名称の来源が英語ではないとする主張に関して史が述べている論拠は2つある。第1は、筆者の表現に直して言えば、“「咖啡」という音訳の第1字の表す音節の母音は *a* である、しかるに、英語の *coffee* の第1音節の母音は[ɔ]、すなわち、*o* の類である、したがって、「咖啡」は *coffee* を音訳したものではない”というものである(「附：咖啡的成長」)。「咖啡」はポルトガル語の *café*、イタリア語の *caffè*、フランス語の *café* のいずれかを音訳したものだろうと史は言う。

しかし、そのような判断を軽々に下すことはできない。まず、米国の英語では *coffee* の第1音節が[k<sup>h</sup>a]とも発音されるし<sup>15</sup>、時代的な考慮に基づいて米国英語の可能性は除外するとしても、

<sup>13</sup> 「おおむね」という限定を付けざるを得ないのは、史の論述が全体として整合性を欠いていることによる。本文で間もなく述べる通り、史は“英語の *coffee* の第1音節の母音は *a* ではないから、*ga* という音訳は英語以外の言語に基づく”と論じている。その見方に従えば、英語の影響によって *jia fei* が *ka fei* に変わることはないことになる。

<sup>14</sup> 加えて、すでに述べた通り、「考非」はスペインの視察報告中に現れるので、それを英語の音訳と見てよいのかという問題もある。

<sup>15</sup> “*coffee* の第1音節”というのは実は自明の概念ではない。そこに含まれる母音の長短によって、[f]が第1音節に属するとも第2音節に属するとも見得るからである。実際、Jones(2011)には音節境界の位置の異なる2種類の発音が示されている。しかし、ここでは問題を単純化し、中国語の音訳の第1

中国における英語の注音の歴史を確かめてみれば分かる通り、英語の[ɔ]を含む音節を、a を韻母とする漢字で表した事例はいくらでもある。以下に、18 世紀中葉に編まれた北京故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本の 1 つである英語語彙集『啖咕喇国訳語』、19 世紀前半以後に流通した『紅毛番話』類の英語語彙集の 1 つである『紅毛番話貿易須知』、1843（道光 23）年に出版された英語学習書であるロバート・トーム（Robert Thom、羅伯聘）『華英通用雑話』上巻、1849（道光 29）年に出版された英語学習書である鄭仁山『華英通語』——以後、『華英通語』の後の版と区別するために『華英通語』道光本と呼ぶ——における注音の例を示す。<sup>16</sup>

『啖咕喇国訳語』：

hawk 哈、horse 哈実、wall 瓦兒、small 土馬兒

『紅毛番話貿易須知』<sup>17</sup>：

一総(all) 丫罇、塩(salt) 沙路、小(small) 土仔罇、水(water) 嘩打

『華英通用雑話』：

hall 哈力、short 沙兒的、office 阿非士、water 沓捷

『華英通語』道光本：

already 阿羅列地、pawn 班、sorry 沙梨、ordinarily 阿顛喇

このようなことであるから、“英語の coffee の第 1 音節の母音は[ɔ]だから、その音訳は「咖」にはならない”とする判断は成り立たない。

史の第 2 の論拠は、これも筆者の表現を用いて言えば、“「咖啡」という音訳の第 1 字の声母は無気音である、しかるに、英語の coffee の語頭の子音は[k<sup>h</sup>]と発音される、したがって、「咖啡」は coffee を音訳したものではない”というものである（「咖啡」の項目）。

しかし、やはり英語の注音の歴史に照らせば、そのような議論にも無理がある。次のように無気音を声母とする漢字によって英語の語頭の/k/を注音した例は広く見られる。

『啖咕喇国訳語』：

castle 加是喇、cold 鉤、cool 孤盧、copper 哥罷

『紅毛番話貿易須知』：

叫(calling) 加林、現金(ready cash) 捏地加示、算数(count) 干打、買弁(comprador) 公不多

字に相当する部分を coffee の第 1 音節として扱うことにする。

<sup>16</sup> 『啖咕喇国訳語』については拙論(2021)、『紅毛番話貿易須知』、『華英通用雑話』、『華英通語』道光本については拙論(2018)を参照。資料ごとに注音の背景を異にするので、本来それぞれの資料および本文に挙げる音訳の例について論じるべき問題もあるが、記述の簡潔を優先して省略に従う。資料における音訳表記上の特殊な要素（小字の使用など）も省いて引用する。

<sup>17</sup> 『紅毛番話貿易須知』では各語彙項目が中国語の見出しとその訳語の注音の 2 要素で構成され、英字で綴られた訳語は書かれていない。括弧内に示した訳語は筆者の推定による。

『華英通用雜話』:

cat 加的、caps 加不士、color 各羅兒、cold 哥力的

『華英通語』道光本:

coffee 喫啡、curry 架厘、cabin 咖扁、cook 谷

これは/k/だけでなく/p/と/t/についても同様で、『華英通語』道光本における注音の例で言えば、「pen 辺」「pocket 博結地」「tea 的」「tell 嚙厘」のごとくである。したがって、“英語の coffee の語頭の子音は[kʰ]と発音されるから、その音訳は「咖」にはならない”とする判断も成り立たない。

さらに言えば、逆に、ポルトガル語やイタリア語であれば音節冒頭の/k/が無気音として注音されると決まっているわけでもない。現代の通俗的な語学指南書を確認してみると、次のように有気音を使っている例も多い。<sup>18</sup>

ポルトガル語指南書<sup>19</sup>:

casa (house) 咋、capaz (able) 卡帕是、com (with) 空、que (what) 科

イタリア語指南書<sup>20</sup>:

carta (paper) 卡了噠、cantare (sing) 康大咧、così (so) 括記、quanto (how much) 況哆

結局のところ問題は、史は諸外国語の特定の語、すなわち、コーヒーの名称について、それを音訳すればどうなっただろうかということ現代の個人の知識に頼って想像してそれを論拠としているが、そのような方法で過去の音訳を論じることはできないということである。音訳の問題は、当該の時代、関係する資料群において各種の発音がどのように表記されているかという体系的な観点から考える必要がある。

## 5 おわりに

19 世紀から 20 世紀初期にかけての文献を用いてコーヒーの中国語名称の多様性とその変遷を探ってみた。

意識語において重要なのは意味であるから、それが他の地方に伝播してその土地の発音に従

<sup>18</sup> この調査に現代の語学指南書を使ったことには理由がある。本来であれば、北京故宮博物院蔵『華夷訳語』丁種本に含まれるポルトガル語、イタリア語、フランス語の語彙集を利用できるところであるが、それらの語彙集においては全体に注音字が統一され、その結果として有気音と無気音のような区別は注音字にまったく反映されていないのである（拙論(2020b)）。

<sup>19</sup> 王小可編『零起点馬上開口說葡萄牙語』（機械工業出版社、2017 年）。括弧内に示した英語の訳語は筆者の追加による。

<sup>20</sup> 繆春萍主編『零起点馬上開口說意大利語』（機械工業出版社、2017 年）。これについても、括弧内の訳語は筆者による。

って読まれても不都合は生じない。しかし、音訳語はそもそも音を表すものであるから、伝播によって発音が変われば、当初の音訳の妥当性——すなわち、原語の発音との類似——が失われていく。コーヒーの名称の発音の *ka fei* への変更はそうした原音からの乖離を解消するための修正だったと考えられる。

現在「咖」の字は「咖啡」では *ka* と読まれ、「咖喱」では *ga* と読まれる。では、カレーの名称の歴史はどのようなものだったのか。当初から現在に至るまで一定して *ga li* だったのか、それとも、コーヒーの名称と同様の変化があったのか。実は、中国語におけるコーヒーとカレーの名称の歴史は平行的ではなく、カレーの名称の歴史にはコーヒーのそれにはない複雑な事情があった。カレーの名称の変遷については稿を改めて論じたい (拙論(2020a))。

#### 文献

- 田野村忠温(2018)「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58巻
- 田野村忠温(2020a)「カレーを表す中国語名称の変遷」『或問』第38号
- 田野村忠温(2020b)「北京故宫博物院蔵『華夷訳語』丁種本第1類の分析—西洋館訳語の編纂とドイツ語の名称の問題を中心に—」『待兼山論叢』文化動態論篇第54号 (大阪大学大学院文学研究科)
- 田野村忠温(2021)「『啖咕喇国訳語』の編纂者と編纂過程」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第61巻
- 曹志耘主編(2008)『汉语方言地图集』语音卷 (商务印书馆)
- 黄河清编著(2010)『近现代辞源』(上海辞书出版社)
- 近现代汉语新词词源词典编辑委员会编(2001)『近现代汉语新词词源词典』(汉语大词典出版社)
- 國語日報出版部編譯組主編(1981)『國語日報外來語詞典』(國語日報社)
- 刘正琰・高名凱・麦永乾・史有为編(1984)『汉语外来词词典』(上海辞书出版社)
- 史有为(2004)『外来词: 异文化的使者』(上海辞书出版社)
- 史有为主編(2019)『新华外来词词典』(商务印书馆)
- 王力(1958)『漢語史稿』下册 (科學出版社)
- 香港中國語文學會詞庫工作組(1994)「“外來概念詞詞庫” 詞條選刊(4)」『詞庫建設通訊』第4期  
[coffeeの項目は黄河清・姚德懷による。]
- 香港中國語文學會詞庫工作組(1997)「“外來概念詞詞庫” 詞條選刊(13)」『詞庫建設通訊』第13期  
[coffeeの項目は徐時儀による。]
- 祝雪・赵旭(2019)「试论外来词 coffee 的汉译特征」『沈阳大学学报 (社会科学版)』2019年第2期
- Jones, Daniel(2011) *Cambridge English Pronouncing Dictionary*, 18th Edition. Edited by Peter Roach,

Jane Setter and John Esling. Cambridge University Press.

Masini, Federico(1993) *The Formation of Modern Chinese Lexicon and Its Evolution Toward a National Language: The Period from 1840 to 1898. Journal of Chinese Linguistics, Monograph Series, No. 6.* Project on Linguistic Analysis, University of California, Berkeley.

**追記** 校正の段階で新刊の黄河清編著『近現代漢語辞源』（上海辞書出版社、2019年）を入手したが、コーヒーの名称に関する記述は用例が多数増補されている点を除けば同書の前身である黄編著（2010）のそれと本質的に同等であった。したがって、本稿で黄編著（2010）について述べたことはすべてほぼそのまま『近現代漢語辞源』にも当てはまる。